

基調講演

胎児から始める生活習慣病の予防～童（わらび） どう宝の思想～

安次嶺 馨

子どもの生活習慣対策委員会 委員長

1 Barker 仮説からDOHaD学説へ

イギリスの疫学者David Barkerは、1980年前後に成人病胎児期起源説（Barker 仮説）を提唱した。すなわち、胎児期において、器官や臓器が形成される時期にストレスや傷害（低酸素、タバコ、薬物など）が加わると、将来の病気（成人病）の原因となる。一方、Gluckman&Hanson が提唱したDOHaD（Developmental Origins of Health and Disease）は、胎児期のみならず、幼児期の環境が悪化すると本来持っている成長発達 のコースがゆがめられ、生活習慣病を発症する。すなわち、持って生まれた遺伝子と環境との相互作用で生活習慣病を発症するというものである。

2 胎児から始める生活習慣病の予防

DOHaDを易しく解説するための図「生活習慣病ツリーと長寿ツリー」を作成した（2005年）。人の一生を一本の木に例えると眼に見えない根っこは胎児期、地上に出た幹は小児期、伸びた枝葉は成人期とする。胎児期のリスクファクターは早産、低出生体重児、妊婦喫煙など、小児期のリスクファクターは人工栄養、ジャンクフード、受動喫煙などである。生活習慣病を予防するには、胎児期・幼児期のリスクファクターを減らすことが肝要である。

3 童（わらび） どう宝の思想

沖縄では、戦死者を悼む言葉として「命（ぬち） どう宝」がよく用いられる。太平洋戦争で、沖縄県民の死者は15万人（県人口約60万人）という。しかし、戦争で失われた15万人よりはるかに多くの命が、平和な現代の沖縄で日々、生活習慣病のために失われている。長生きできる命を早く失うのは、本人にとって、家族にとって、また社会にとって大きな損失である。演者は「胎児期からの生活習慣病予防」を掲げて、「童（わらび） どう宝」という概念を提唱している。これは、胎児・新生児期から生活習慣病予防対策を実践し、子どもの健康長寿を目指すもので、DOHaDの核心につながる考え方である。